

- 1 財務会計の機能と制度
- 2 財務会計の基礎概念
- 3 「企業会計原則」の一般原則等
- 4 財務諸表の表示
- 5 損益会計
- 6 資産会計総論
- 7 棚卸資産
- 8 固定資産
- 9 リース会計
- 10 繰延資産
- 11 研究開発費等
- 12 負債会計
- 13 純資産一総論

14 純資産—自己株式
会計の性格
取得
保有
処分及び消却
15 純資産—その他の資本剰余金
資本維持論
その他の資本剰余金
贈与剰余金(受贈資本)
評価替剰余金(評価替資本)

読み方、理解の仕方のポイント

☆☆★★★自己株式の処分等に係る付随費用 ①P150

付随費用は株主との直接的な取引ではない→だから損益取引だ、という発想がまず大事。
次に、自己株式本体の取引と付随費用を払う取引を別個の取引としてとらえている、という前提が大事
そして、仕訳の発想法として「全体を1つ」とする発想と、「別個バラバラ」とする発想の2種類がある、
ということが大事。→例えばセールアンドリースバック ①P99

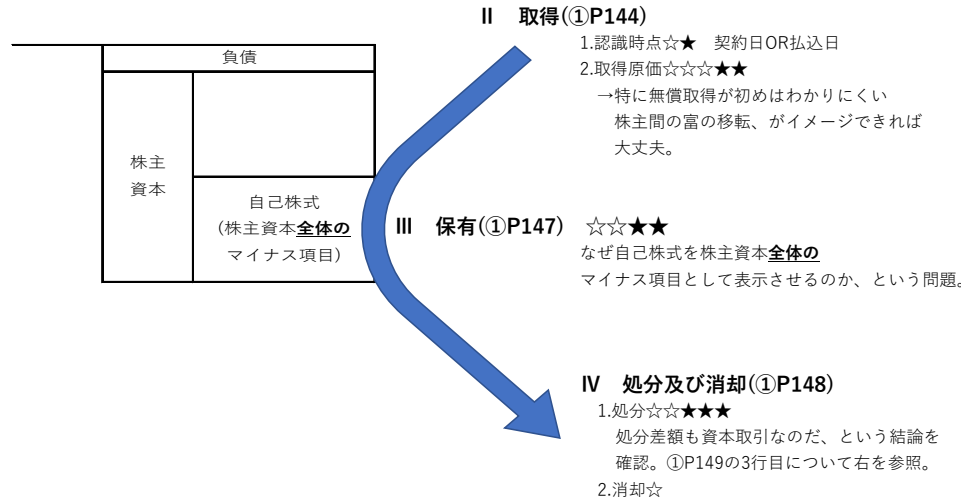
15章全体について ①P153～

会計上の払込資本(Not留保利益)に含める理屈もあり得る(でも現行制度上は留保利益としている)項目についての議論です。

☆☆★★★自己株式の会計の性格	
資産説	①P144 自己株式を資産として扱う→資産に関する取引(損益取引)
資本控除説	①P144 自己株式を資本(のマイナス項目)として扱う→資本取引
☆☆物価変動下において、企業が維持すべき資本の額を巡る「資本維持論」の、3つの考え方。	
名目資本維持	①P154 投下された貨幣の名目額を維持すればOK
実質資本維持	①P154 投下された貨幣の一般購買力を維持しないとダメ
実体資本維持	①P154 投下された資産各々の物価額までも維持しないとダメ

自己株式の論点の全体像

それぞれの場面において、自己株式の会計の性格が「資本のマイナス」か「資産」でリクツが対立しつつ
結局「資本のマイナス」説が勝つのだ、という観点で頭を整理してください。



概念セット数 2

①P149の3行目について
「順番が異なると結果が異なる」例

スタートT/B	
そ資剰	100
そ利剰	900
自己株	△ 500

当期中、AとB 2つの自己株式処分が行われた。

A

現預金	100	自己株	300
差損	200		

B

現預金	300	自己株	200
		差益	100

まずA→次B なら

A処理後T/B

そ資剰	0
そ利剰	800
自己株	△ 200

B処理後T/B

そ資剰	100
そ利剰	800
自己株	0

まずB→次A なら

B処理後T/B

そ資剰	200
そ利剰	900
自己株	△ 300

A処理後T/B

そ資剰	0
そ利剰	900
自己株	0

「順番が異なると結果が異なる」